

産業廃棄物処理プラントの設計・製造を手がけるシマ(香川県観音寺市)は、高効率な家庭用生ごみ乾燥機の新製品を開発した。従来製品に比べて処理時間を2割、消費電力を3割削減し、生ごみの種類に応じた乾燥ができるようにするなど機能性も高めた。先行販売を始めており、初年度に5000〜1万台の販売を目指す。

生ごみ乾燥 処理時間短縮

新型乾燥機は「パリパリキュー アルファ」の名称で、希望小売価格は7万7000円。シマのネットストアで先行販売しており、2025年4月から本格販売する。生ごみにセ氏60〜80度の温風を当てることでパリパリの状態にし、簡単に捨てることができる。

従来の同社製品は1キロを処理する時間が10時間40分かかったが、新製品では8時間20分まで短縮した。生ごみを入れるバスケットの形状を改良し、温風の当たるムラを少なくするなど工夫を凝らした。電力消費も効率

シマ、家庭用新型機 消費電力も3割減

化し、電気代は1回あたり52円から37円まで下げた。

「誰もが簡単に使えて満足する機能」(商品開発部開発研究チームの来見幸太郎課長を指し、細部にもこだわった。温度センサーを搭載し、野菜や魚・肉の骨など生ごみの種類に応じた乾燥を可能にした。説明書がなくても使えるようボタンなどは最小限にした。

乾燥が終わればセンサーが検知して自動で停止する。子どもが作動中に誤って開けてしまった場合もすぐに止まるようにした。

新製品は日本デザイン振興会(東京・港)が主催する2024年度の「グッドデザイン・ベスト100」を受賞した。

機能性やSDGs(持続可能な開発目標)への貢献が高い評価を受けた。安全で子育てのゆとりを増やすといった点も支持され、NPO法人のキッズデザイン協議会(東京・港)の「キッズデザイン賞」も受賞した。

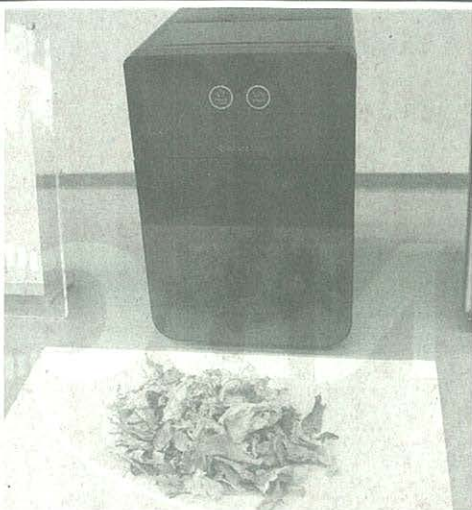
シマは2013年に生ごみ乾燥機の市場に参入し、今回改良した製品で

4号機目になる。23年度末までに累計約30万台の販売実績があり、国内市場ではバナソニックと首位を争っているという。

水分含有量の多い生ごみはカビの発生や焼却炉の温度低下など、処理するうえで自治体の悩みの種だ。このため多くの自治体は生ごみ処理機の購入費用を助成している。香川県内で助成額が高水準のまんのう町は、購入費用の2分の1を上限に最大4万円を補助している。シマは自社のホームページで自治体の補助内容や申請方法を紹介する。

など、制度も生かしながら販売拡大をめざす。シマは23年に社名をこれまで島産業から変更した。島直幹社長は狙いを「乾燥機を海外にもアピールするため」と話す。同社の24年1月期の売上高は約22億円で、約2割を乾燥機の売り上げが占める。

プラント向け事業は売り上げが受注の有無に大きく左右されることから、島社長は乾燥機事業を「安定した収入源としたい」と話す。まず現状の倍以上となる10億円の売り上げを目指す。



シマが開発した新型の生ごみ乾燥機。パリパリの状態にできる(写真上)。生ごみを入れるバスケットの形状を工夫し、効率化に成功した